

わかやま母親通信

第56号 2017年9月9日発行

発行 和歌山県母親大会連絡会 事務局 和歌山市小松原通3の20 和歌山県教育会館内
和教組 TEL073-423-2261 FAX073-436-3243 母連メール：w_haharen@wkn.or.jp

生命を生み出す母親は
生命を育て
生命を守ることをのぞみます

8月19～20日 第63回日本母親大会 in 岩手(盛岡)

最近の異常気象で長く東北に集中豪雨や天候不順をもたらし、この日も曇天の中、盛岡市に降り立ちました。盛岡駅周辺はよく整備されていて、新幹線が着く駅3階から直通で分科会場のマリオスやアイーナに行くことが出来ました。

和歌山県の参加者は27名。各自の交通手段で、場合によっては2泊、3泊かけての参加でした。

第1日目には、分科会と並行して、岩手・宮城・福島3県6コースの被災地訪問が企画され、多くの

希望者がある中、和歌山からはやっと6名だけ認められて、参加していただきました。後日、日本母親から「被災地訪問」DVDが製作される予定ですので、訪問された方の生報告と合わせて、被災地の現状報告を広める活動に取り組みたいと思います。

当日は、岩手大学を含む3分科会場（若い世代中心に取り組んだ「行列のできるしゃべくりカフェ」を始め25分科会）にも多くの方が参加してくれました。その感想文を何回かに分けて掲載していきます。尚、地方紙の岩手日報には2面全面に掲載されました。

第2日目の全体会は、駅と会場であるタカヤアリーナを何台ものシャトルバスが何往復も運行しました。花巻農業高校による勇壮な鹿踊りや伝統的なさんさ踊りの文化行事を楽しみ、熱気あふれる各地の運動交流ではその元気さに圧倒されました。記念講演は、

フォトジャーナリストの安田菜津紀さんによる「写真で伝える世界、東北の“今”」と題したお話でした。その落ち着いた話しぶりと映像を映しながら語られるリアルな現状に、参加者は静かに見入り聴き入りました。2日間の参加者は、のべ10800名と発表されました。



フォトジャーナリスト 安田菜津紀さんの講演



～8月19日 被災地訪問レポートから～

被災地訪問レポート～岩手県陸前高田市と三陸鉄道～

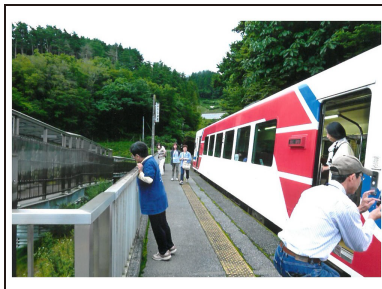
那賀 新婦人岩出 M. K.

日本母親大会のおかげで、岩手県陸前高田市訪問と三陸鉄道南リアス線に乗ることが出来ました。

「被災地は今」ということで、陸前高田市長 戸田太さんのお話を60分聞きました。市長に当選して3週間目で、3.11の大地震が起こった。それから今日まで、破壊された街の復興と被災者の救援、支援に心を尽くして取り組んできたことが、ほとぼしり、にじみ出るお話でした。県からの通達は、そんなに高い津波予報ではなかったが、実際には15mから18mもの津波だった。“父母が居て、朝学校へ行く”など、当たり前の生活…、それが一瞬にしてなくなった。当たり前の大事さ。孤児40人、どちらかが亡くなった子110人。市職員や消防署員も多く亡くなった。市長の奥さんも、市内を流れる気仙川を9kmさかのぼった所で車ごと発見され、子どもには見せられない変わり様だったと。障害者団体とのこれからの関わりについても話されました。

「三陸鉄道に乗る」では、大船渡市の盛(さかり)駅から釜石までの3.6km、7割がトンネルでした。案内人の熊谷(くまがい)さんのお話も分かり易く進みました。入り江になった所は、津波で家々が無くなり更地になっていました。説明がなかったら、そこに住居が、町があったなんてとても分かりませんでした。今までの倍くらいの高さの防潮堤がいたる所で造られていました。明治の大津波で38.4mも来たという綾里(りょうり)、この時の津波の経験を生かして、低い所に家を建てなかった吉浜は、今回被害が少なかったそうです。

恋し浜ではホームに出てみました。三陸鉄道は高い所を走っているのも、鉄道の被害は少なく、また内陸の町では津波の被害を免れた所もありました。



恋し浜駅のホームで



貝殻に書かれたメッセージ



恋し浜駅を上り下りする階段

バスの中でお話をしてくれたのは大船渡市職員の方でした。この方のお話でも悲痛でしたが、もう書き切れません。またの機会があればお伝えしたいと思います

被災地訪問レポート～福島県相馬訪問と懇談～

有田 新婦人 I.G.

広い荒れ地にコンクリートの廃屋、フレコンバックの仮置き場、ソーラーパネルがバスの車窓から見える。ダンプカーが走り、工事のショベルカーが動いている風景。他に人はいない。

相馬市→南相馬市→浪江町→飯館村とバスで回る。相馬のガイド村松さんが、避難指示の解除となった所を案内し説明してくれた。



川俣町 川俣町山木屋の仮置き場



ドローンで撮影/浪江町請戸の仮置き場

○田んぼや畑、家のまわりなど5cmの土(トンの黒い袋)に詰められ、積み上げられている。なんと1250万袋(ドーム18杯分)あり、田んぼが仮置き場になり13万ヶ所あるそうです。それも黒い袋の耐用年数が3年だという。廃材などは仮焼却場で燃やして軽量化するらしいが、いつ中間貯蔵施設に運ばれるのかわからない。除染は家の周り、道路だけで、裏山や池の周りなどはしない。飯館村では山林の大部分は除染されないままだ。

○ソーラーパネルがあちこちに設置されている。NPO法人が水田に「半農半エネ」として設置し、収益を農業復興と地域再生のために活用している。しかし、大規模なメガソーラーは大きな資金がいるので大企業(麻生副総理の)が造っているそうです。

○浪江町立請戸(うけど)小学校の校舎は、立派で自校方式の給食室もあったようですが、廃屋になってしまいました。学校では防災学習をしていたので、地震があつてすぐみんなで近くの山に避難し、親が迎えに来た子どもも一緒に山へ登った後津波が来て、80人の生徒全員無事だったとうれしい話を聞きました。

○午後は、福島に戻り「ふくしま復興共同センター子どもチーム」のお話を聞き、交流しました。避難指示の解除が出されたが、買い物や病院、交通など原発事故前の生活が送れる環境が整っていないことや、6年という長い年月のなかで避難先に定着したり、一人ひとり様々な理由で戻るができず、帰還した住民は1～2割程度にとどまっているということでした。そして福島を離れた人離れなかった人、帰ってきた人帰れなかった人、それぞれが自由に判断した選択を尊重してほしいとの訴えが心に響きます。

○時間的にももう少しバスを降りて現地を見学したかった。宿の方、ガイドの方、分科会を担当して下さった方々に感謝します。紀伊半島に原発を造らせなかった先輩方に学び、これからも原発、福島のことを学んでいきたいと思えます。

被災地訪問レポート～福島/原発災害情報センター → 岩手県陸前高田市～

日高 新婦人 T.F

* Fさんは、希望した「被災地訪問」ができなかったため、前後日に自主的に訪問されました。

8月18日、被災後初めて福島へ行きました。私は、阪神大震災を兵庫県宝塚市で経験し、和歌山に移住してから3.11があり、宮城県の地震津波の状況は3回の訪問で目の当たりにしていました。しかし、原発災害があった福島へは今回が初めてです。飛行機から眼下に広がる豊かな緑を見て、「こんなきれいな町や村が…」とやり切れない気持ちになりました。

まず訪ねたのは「原発災害情報センター」です。長野県から運ばれた木材で建てられたというこの建物、玄関を入ると、『原発から出る核のゴミとそこに生じる放射能は 子どもや孫の代までに止まらず 百万年消えることはない』と書かれた小出裕章先生の書と「センターの敷地建物は除染しました。平均放射線量は 0.13～0.15us/h です。」という紙が貼られていて、こんなに離れているのに（白河市）と放射能の恐ろしさを痛感しました。富岡町から越してきたという館長さんから、その後のことを伺いました。富岡町の帰還率は1.6%で、就労、学校、家族間の問題など多くの人の人生をめちゃくちゃにし、今もその状況は深刻化していると思いました。ここには、自殺した酪農家が壁に書いた遺書も保管されていました。



この建物の隣には「アウシュヴィッツ平和博物館」があります。別棟のレンガ造りの小屋には、アンネの資料も展示されていました。日本とドイツの歴史認識の違いに驚き、過去・現在・未来をつなげ、未来へ真実をつなげる私たちの責任を痛感しました。

大会後は、陸前高田へ行きました。海岸線が近くに連れて、女川や石巻のように津波に飲み込まれ何もなくなった土地に盛土があり、工事の車が土埃を上げて行きかかっていました。一つ残された5階建ての住宅は、筒抜けになっていて、5階のベランダに「14.5m」津波到達点が表示されていました。7万本ほどもあった



という高田松原、その海側に使われていないユースホステルの建物があったなどの条件で奇跡的に残った一本松。その他の松は根こそぎ津波で家々に直撃したこともあったようです。全体会の講演で、安田さんの義理のお父さんは「何が希望の松か、見たくない」と言われたと聞き、如何に当事者の気持ちを置き去りにした復興かと悲しくなりました。義理のお母さんは、9キロも上流で見つかったとのことでした。

私たちが現地で見たのはほんの一部です。でも、当事者の方にとって一番辛いのは周りの人が無関心でいることではないでしょうか。母親大会の機会に、友だち7人で行く事ができて、これから広く伝えていこうと思います。 * 報告は、次号に続きます。

～8月19日 分科会参加者の感想から～

25 沖縄と連帯して 映画「標的の島 風(かじ)かたか」鑑賞と運動交流

有田 母連 M. T.

この映画を観て、涙が出、胸が苦しくなりました。アベさんもこの映画を観たらいい。

「平和が根底」「本島を追われ、石垣島へ移住して農業が軌道に乗ってきたのに、また土地をとられるのか。」「今沖縄を戦場にすることを前提としている。」——87才の島袋文子さんは、「止めきれない。また火の海になる。私がぶれたら死んだ人に申し訳ない。許されない。」と、毎日辺野古に座り込む。「戦争に反対した一人の人間が存在したという歴史が残る」と活動する。私に何ができるかと考えさせられました。

“沖縄に基地はいらない。日本に基地はいらない。止めたい。”

23 啄木、賢治と憲法を語る

対談 石川啄木記念館館長と宮沢賢治記念館学芸員

有田 高退教

M. M.

小森陽一氏から、夏目漱石・石川啄木・宮沢賢治、そして憲法の話。それぞれが時代の中で先駆的な優しい感覚で、自分の思いを伝えていることなどが分かりました。

その後、対談は、森義真氏(石川啄木記念館館長)と牛崎敏哉氏(宮沢賢治記念館学芸員)と森三紗氏(詩人)の対談でした。啄木の現代的な意味、賢治の未来に向けたメッセージが良く分かり、改めて作品を読んでみようと思いました。

○啄木の歌より 時代閉塞の奈何せむ秋に入りてことに欺く思ふかな

はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざりじっと手をみる

こみ合へる電車の隅にちじこまるゆふべゆふべの我のいとしさ

地図の上に挑戦国にくろぐろと墨を塗りつつ秋風を聴く

○賢治の 悲しみは力に ほ(欲)りはいつくしみに いかりは知恵にみちびかるべし
言葉より世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

9 医療・介護を国民の手に一沢内村の闘いに学ぶ

那賀 新婦人紀の川／県母連 M. Y.

沢内村の映画「命の山河」に感動し、その沢内村を60年間支え続けてきた取り組みを学びたい人たちや自分の町の医療や介護について話したいという人たちが教室はいっぱいで、210人集まりました。沢内村にも、市町村合併があり、また沢内村病院が1億円を超える赤字のため、診療所に縮小していかざるを得ないという事態もあったけれど、「命の行政」を守るために、住民で話し合い、住民全体で話し合ったとのこと。

「三せい運動」をやり続けているそうです。「三せい運動」とは、「一人一人でせい」「話し合っでせい」「みんなでせい」という意味で、この「せい」は、「しよう」ということだと聞きました。社会保障は社会運動があつて初めてできるものだと実感しました。

13 青い地球を守ろうー地球温暖化 いま私たちにできること

県母連 S. N.

この分科会の司会をしました。「苦手なテーマやな。うまく進められるかな。」と不安いっぱい始めました。途中で司会者であることを忘れるほどのショックを受けました。

助言者の桃井貴子さん(NPO 気候ネットワーク)のお話は、歯切れよく明快で、今私たちの地球はどんな状況になってきているのか、世界の気温が1℃上昇することは大変な事態で、このまま手をこまねていけば3℃、4℃と上がり続けるであろう温暖化と異常気象の関連、各地で起こる集中豪雨や干ばつ・大型台風・ハリケーン・竜巻などが瀬発する理由について、映像と具体的数値を示しながら説明してくれました。

本当に怖い！今まで何となく不安には感じていましたが、目から鱗のような話に衝撃を受けて、このまま放置すれば、地球上の生物は生きていけなくなると実感しました。

昨年『パリ協定』は、地球規模の危機的状況を回避すべく、“脱炭素社会”を目指して、発展途上国も含め法的拘束力のある枠組みづくりに成功しています。しかし、日本政府は本気で取り組む気があるのか、石炭火力発電所(最もCO2を排出)の新設を打ち出しています。討論では、政府には具体的目標を出し本気で取り組むように迫る、地域では原発再稼働NO！石炭火力発電新設反対の声を挙げ、地産地消を基本に自然エネルギーを世論にしていく、個人でも省エネやごみ減量に努力をしようと意見が出ました。

～8月20日 全体会参加者の感想から～

海草 社会福祉法人職員 A. K.

盛岡の伝統芸能舞台から始まり、とても熱気あふれる雰囲気でした。厳かな舞や華やかな踊りはとても感動的で見入ってしまいました。

写真家の安田菜津紀さんの講演は、写真を通してのお話しはとても分かりやすく聞きやすかったです。私たちがニュースでしか見ないシリアの写真とお話の中では紛争が起こっている地域でもそこで暮らす人々や元々あった安心安全の地域など、平和ということを考えさせられました。東北のこともご自身の体験をからのお話しで、相手の立場や考え、思いを受け止め理解することの大切さを感じました。お話上手で安田さんの講演に引き込まれました。

会場は、活気にあふれパワフルなお母さん方でいっぱいでした。このお母さん方が日本を支えていると感じ、私も頑張っついていかなければと思いました。…次号に続く。

.....

* 盛岡駅の近くに、宿や会場があつて良かった。* 来年、近くであれば、バスがいいです。

* 案内の人たちがたくさんいて、親切に対応してくれた。* おいしいものが食べられた。

* 看板やステッカー、ポスターが、街のいろんなところに貼られていて、うれしかった。

* 【物産展】山田産の蒸しほたてと蒸し牡蠣がものすごくおいしかった！

来年は、高知(2018. 8. 25～26)です。団体バスでワイワイ言いながら行きましょう。